



Data

監督：イ・ビョンホン
 出演：リュ・スンリョン／イ・ハニ
 /チン・ソンギュ／イ・ドン
 フィ／コンミョン／シン・ハ
 ギュン

👁️👁️ みどころ

「南北分断モノ」は韓国特有のテーマだが、犯罪モノ、刑事モノ、家族モノ、純愛モノ等どんなジャンルでも韓国映画は熱く激しいものが多い。大阪電気通信大学の王少峰准教授の『日・韓・中 三国の比較文化論』によると、「韓国では実際の兄弟でなくても、親しくなれば『兄』、『弟』と呼び合うほど、血縁関係が重視されている。」そして、「親しくなれば兄弟、姉妹のように濃密な間柄となって、そこで信頼関係が生まれる。」という国民性を有するそうだが、さて、本作の5人の刑事たちの結末は？

「韓国の歴代観客動員数 No. 1！」にはびっくりだが、これまでのベストテンや、カンヌでパルムドール賞を受賞したポン・ジュノ監督の『パラサイト 半地下の家族』（19年）に比べると、私にはその出来はイマイチ。しかし、コメディもいろいろ、好みもいろいろだから、今ドキの韓国の若者には、この手のコメディが受けるのだろう。

そんな“斜め目線”を持ちながらも、実は私も、再三バカ笑いを・・・。



■□■ 1600万人突破！韓国の歴代観客動員数No.1に！■□■

これまで韓国映画の歴代観客動員数ベスト10は、「韓国映画通に贈る趣味的通信 韓国映画通」の2020年1月9日のホームページの記事によれば、次のとおりだ。

- 1 バトル・オーシャン海上決戦 CJエンタテインメント 2014年 17,613,682人
- 2 神と共に-罪と罰 ロッテエンタテインメント 2017年 14,410,366人
- 3 国際市場で逢いましょう CJエンタテインメント 2014年 14,257,115人
- 4 ベテラン CJエンタテインメント 2015年 13,414,009人
- 5 グエムル-漢江の怪物- ショーボックス 2006年 13,019,740人
- 6 10人の泥棒たち ショーボックス 2012年 12,983,330人
- 7 極限職業 CJエンタテインメント 2019年 公開中
- 8 7番房の奇跡 ネクストエンタテインメントワールド 2013年 12,811,206人
- 9 暗殺 ショーボックス 2015年 12,705,770人
- 10 王になった男 CJエンタテインメント 2012年 12,319,542人

日本の人口は1億2615万人（2019年12月1日現在）だが、韓国の人口は5184万人（2019年7月基準）だから、そんな韓国での1000万人の動員はとにかくすごい。そのベスト10、ベスト20を見れば、歴史モノ、感動モノ、家族モノ、SFモノ、南北分断モノ、そして、さまざまな問題提起作があり、監督も『パラサイト 半地下の家族』（19年）ではじめて韓国にカンヌ国際映画祭のパルムドール賞をもたらしたポン・ジュノをはじめとする多くの著名監督がランキングされている。そんな中、韓国公開半月で1000万人を突破。話題が話題を呼び1600万人を超え、ついには歴代観客動員数No.1を記録したのが、「昼はチキン売り 夜は潜入捜査官」「犯人を挙げるか、チキンを揚げるか!」をキャッチフレーズ(?)にした本作だ。

「麻薬捜査班が検挙のために偽装営業したのは、フライドチキン店!?!」「前代未聞の“揚げる大捜査線”が始まる!!」「★★★潜入捜査の絶対ルール★★★1. 揚げたて熱々をお客様の元に! 2. ソースは秘伝のカルビソース! 3. 狙った獲物は絶対に逃さない!」等の文言が踊るチラシを見れば、本作は「潜入捜査モノ」ながら、『インファナル・アフェア』（02年）（『シネマ5』333頁）、『インファナル・アフェア～無間序曲～（INFERNAL AFFAIRSII）』（03年）（『シネマ5』336頁）、『インファナル・アフェアIII／終極無間』（03年）（『シネマ17』48頁）のようなリアルなものではなく、コメディだということがすぐにわかる。しかし、なぜそんな「コメディもの」がベスト10に入っただけでなく、歴代観客動員トップに?

■監督は?俳優陣は?■

本作の監督はイ・ビョンホン。そう聞くと、韓国映画通なら「え、あのイ・ビョンホンが、こんなコメディの監督を?」と驚くはず。イ・ビョンホンと言えば、『誰が俺を狂わせるか』（95年）（『シネマ19』130頁）でデビューし、以降、『JSA』（00年）（『シネマ1』62頁）、『純愛中毒』（02年）（『シネマ6』326頁）、『甘い人生』（05年）（『シネマ7』227頁）、『悪魔を見た』（10年）（『シネマ26』185頁）等々に出演し、演技力に加え、作品ご

とあらゆるキャラクターを演じられることから、「千の顔を持つ俳優」と称されている、韓国を代表する名優。しかし、本作のイ・ビョンホンは同姓同名ながらもまったくの別人で、1980年生まれの若手監督だ。

本作は、「麻薬捜査班」の結集する5人のチームワークが最初から最後まで見モノだが、その核となるのがコ班長。そのコ班長役で、クライマックスが近づくとつれて「ゾンビ班長」と呼ばれる大仕事を成し遂げる俳優が、『王になった男』（12年）（『シネマ30』89頁）で名優イ・ビョンホンと共演していたリュ・スンリョンだ。彼は、その他に『バトル・オーシャン／海上決戦』（14年）や『7番房の奇跡』（13年）等に出演しており、時代劇からコメディまで何でもこなす俳優だが、私にはあまり馴染みのない俳優。

また、石原裕次郎をボスにしたかつての人気ドラマ『西部警察』の面々は渡哲也、館ひろし、寺尾聰、藤岡重慶等々のメンバーだったが、本作でコ班長の下に結集するのは、①麻薬捜査班の万能トラブルシューターのチャン刑事（イ・ハニ）、②麻薬捜査班の絶対味覚のマ刑事（チン・ソンギョ）、③麻薬捜査班の孤独なチェイサーのヨンホ刑事（イ・ドンフイ）、④麻薬捜査班の危険な情熱のジェフン刑事（コンミョン）の4人。それぞれのキャラの濃さは『西部警察』の面々以上だ。とりわけ、それは本作のクライマックスになる大乱闘シーンで顕著になるが、その是非は？また、70歳老人のくせに、私はどうしても美人女優に目が行ってしまうが、その点ではチャン刑事のアクションは十分だが、美貌はイマイチ・・・？

■□□コメディもいろいろ。好みもいろいろ。さて本作は？■□□

私はコメディ映画が嫌いなわけではない。『男はつらいよ』シリーズは大好きだし、馮小刚（フォン・シャオガン）監督の『イノセントワールドー天下無賊ー（天下無賊／A WORLD WITHOUT THIEVES）』（04年）（『シネマ17』294頁）や、寧浩（ニン・ハオ）監督の『クレイジー・ストーン〜翡翠狂騒曲〜（瘋狂の石頭）』（06年）（『シネマ17』309頁）も大好き。また、周星馳（チャウ・シンチー）監督の『カンフーハッスル』（04年）（『シネマ17』484頁）も大好きだ。しかし、『痛快なりゆき番組 風雲！たけし城』やザ・ドリフターズの『8時だよ！全員集合』のような、笑いだけを狙ったアホバカバラエティーは好きではない。したがって、韓国で近時大ヒットした『神と共に 第一章：罪と罰』（18年）（『シネマ45』未掲載）もあまり好きではなく、私は星3つとした。

従軍慰安婦問題や元徴用工問題について、前の朴槿恵（パク・クネ）政権の政策を大きく転換させた文在寅大統領の登場によって、近時の日韓関係は冷え込み、観光客も激変しているが、『冬のソナタ』に代表される一時の韓流ドラマブームはすごかった。終戦直後にはラジオドラマ『君の名は』の大ヒットによって、その放送時間帯は湯が空になったという社会現象まで生まれたが、それと同じように、当時の日本のおばさま族はこぞってTVにへばりついていただけた。しかして、本作の観客を見ていると、今なおその名残がある

ことがよくわかった。つまり、韓国 No.1 の大ヒット作にもかかわらず、本作の入りは半分程度だったが、そのほとんどはおばさま族。そのため、あちこちでポリ袋の音が聞こえてくるうえ、スクリーン上にちょっとした笑いを誘うシーンが登場すると、あちこちでバカ高い笑い声が。これは、完全に普通に観る映画とは違うと実感！さらに、終映後エレベーターに向かっていると、「オーバーアクションがカッコいい！」「やっぱり日本の映画とは違うねえ！」等々の“感激”を語り合う、かん高い声があちこちで。

なるほど、私にはイマイチの本作も、日本のおばさま族には感激作らしい。そうすると、本作が韓国の若者たちに大ヒットするのは当然かも。だって、今ドキのくだらない邦画に日本の若者は結構満足しているようだから・・・。

■□■ 韓国人の国民性は？ブレの大きさは？その結束力は？ ■□■

去る2020年1月11日に行われた台湾の総統選挙では、民主進歩党の蔡英文氏が約820万票（得票率57%）を獲得して、国民党の韓国瑜氏の約550万票（得票率39%）に圧勝した。台湾は、戦後1947年2月～1987年7月まで長い戒厳令下に置かれたが、その後の民主的な選挙による政権交代は順調に進んでいる。これは、世界的にも珍しいものだ。それに対して、1950年～1953年の朝鮮戦争停戦後、韓国は経済力では北朝鮮に圧倒的な差をつけると共に、民主主義国家としての歩みを続けてきたが、政権交代の度に歴代大統領が逮捕されたり自殺したりしてしまうから、政治の面では非常にブレが大きい国。そして、ブレの大きさは、韓国人の国民性も同じらしい。

ちなみに、私は2019年末に大阪電気通信大学の王少鋒准教授と会い、彼女の著書である『日・韓・中 三国の比較文化論』（00年）を贈呈されたが、それを読むと、「日・韓・中三国文化の同質性と異質性」が面白かった。同書では、日・韓・中三国文化の異質性について、風土を①島文化（日本）、②半島文化（韓国）、③大陸文化（中国）に分けたうえで、「日常レベルにおける生活様式」、「非日常レベルの祝祭」、「言語」を対比し、最後に「国民性の対比（まとめ）」をしている。そこでは、韓国人について、「韓国では実際の兄弟でなくても、親しくなれば『兄』、『弟』と呼び合うほど、血縁関係が重視されている。これは親しくなれば血縁と等しい強い紐帯感が生じるという意味である。韓国では男同士が手を握り合って歩いているのをよく目にする。親しくなれば兄弟、姉妹のように濃密な間柄となって、そこで信頼関係が生まれる。」と書かれていた（203頁）が、本作における5人の刑事たちの結束ぶりを見ると、なるほど、なるほど・・・。

■□■ 水原カルビ味チキンの味は？麻薬と同じく中毒性が？ ■□■

本作は、もう後がない5人の麻薬捜査班の刑事たちによる「潜入捜査モノ」と宣伝されているが、実際には、犯罪組織のアジト前にあった廃業寸前のチキン店を引き継ぎ、出前等による情報収集を狙って、本格的な偽装営業を開始するストーリーだから、本来の意味

での潜入捜査モノではない。そんな本作が、韓国動員1600万人突破、歴代興行収入No.1の記録的メガヒットになったのは、「昼はチキン売り 夜は潜入捜査」「犯人を挙げるか、チキンを揚げるか」等の面白い宣伝文句のおかげ！？いやいや、やはりそれだけではなく、トラブルメーカーながら、意外にも絶対味覚の持ち主だったマ刑事が厨房長として作る「水原（スウォン）カルビ味チキン」の味が素晴らしかったからだろう。

もともと、「水原カルビ味チキン」の大ヒットによって全国に名を馳せるようになり、テレビ取材の効果もあって全国から客が押し掛けてくると、捜査は後回し、チキン売りで息つく暇もないほど忙しくなってしまったから、アレレ……。 「水原カルビ味チキン」には、麻薬と同じような中毒性（？）があるらしい。そのため、今や押し寄せてくる客と同じように、5人の刑事たちも、犯人を挙げる以上にチキンを揚げる中毒に罹ってしまったようだ。そんな中、ある日、犯罪組織と接触する絶好の機会が訪れたが……。

■□■取引現場を押さえれば一網打尽！ハイライトは？■□■

「任侠道」を追求している「山口組」や「神戸山口組」では、麻薬でシノギをすることはご法度とされている。多分、それは建前だけだろうが、それでも日本はまだマシだ。他方、本作にみる「悪党界のドリームカムトゥルー」であるイ・ムベ（シン・ハギョン）や、「悪党界のショールーム・ザ・マネー」であるテッド・チャン（オ・ジョンセ）を見てみると、そんな自制心すら全くないようだ。イ・ムベとテッド・チャンの力関係では、圧倒的にイ・ムベの方が強く、麻薬捜査班の5人がチキン店の偽装営業をしてまで、どうしても捕まえたいと切に思う悪党がイ・ムベ。この男は、相手を惑わす巧みな話術と華やかなスタイルを誇る無慈悲な悪党らしい。他方テッド・チャンは、イ・ムベに毎度やられっぱなしの弱々しい悪党で、今回もイ・ムベが提案した新たな麻薬流通事業にたちまち気持ちが傾き、表向きはフランチャイズのピザ屋を成功させた実業家だが、裏では金になれば何も確かめずに法を犯すこともためらわない悪人らしい。

しかして、本作ラストではこの2人の間で大規模な麻薬取引が行われるが、今その動きに執拗に食らいつき、麻薬取引の現場に潜入しているのは、ヨンホ刑事ただ1人だ。2つの犯罪組織を一網打尽にするためには、取引現場を押さえ、ブツを押収することが不可欠だが、それには麻薬捜査班5人全員の協力が不可欠。さあ、そこでヨンホはどんな非常手段を……？

本作前半では、水原カルビ味チキンを考案したマ刑事の「絶対味覚」という隠れた才能にびっくりさせられたが、本作ラストのクライマックスでは、5人が5人とも格闘技で「オリンピック韓国代表」のような隠れた本領を発揮するので、それに注目しながら、悪人たちを一網打尽にしていくハチャメチャアクションをたっぷり楽しみたい。何事にも一途に熱くなる傾向が強い国民性を持つ韓国の人たちは、きっと本作のそんな結末に大興奮し、大喜びしたのだろう。その結果、本作は、「韓国動員1600万人突破！歴代興行収入No.

1の記録的メガヒット！」するとともに、コ班長を代表とする5人の刑事たちは、すべて2階級昇進のご褒美が。スクリーン上はそれにて万々歳だが、本作がそれほど大きな興行収入を挙げたのなら、イ・ビョンホン監督とプロデューサーにも、それ相応の特別ボーナスを支給しなければ・・・。

2020（令和2）年1月20日記